

上方版画と伊藤若冲

静岡県立美術館学芸員 福士雄也

■伊藤若冲の版画

○伊藤若冲（1716～1800）

京都の人。生家の青物問屋を継ぐも、四十歳で家督を弟に譲り作画生活に入る。《動植綵絵》に代表される緻密な着色画のほか、軽妙な水墨画も多く遺す。

○若冲による版画の作例

- ・宝暦十年（1760）《髑髏図》（滋賀・西園寺ほか）
- ・明和四年（1767）《乗興舟》（千葉市美術館ほか）
- ・明和五年（1768）《素絢石冊》（素絢帖、個人蔵）、《玄圃瑶華》（個人蔵）
- ・明和八年（1771）《着色花鳥版画》（平木浮世絵美術館）

このほか、天明二年（1782）の《賞春芳帖》（千葉市美術館）にも若冲の画が含まれる。

■拓版画

○通常の木版印刷（左版）では版下（版画の下絵）を裏返しに貼り付けて版木を彫るのに対し、拓版では版下そのままを陰刻に彫り込んで、石碑から拓本を取るように写し取る。

○《乗興舟》、《素絢石冊》、《玄圃瑶華》が拓版の技法による。

○版画用語としては、「正面摺」の方が一般的。

○元禄年間（1688～1704）以降、唐様書家が書道の手本を作るために広めた正面摺の技法を絵画へ応用したのが「拓版画」と呼ばれているもの。

宝暦十二年（1762）刊の忍海上人『有山堂画譜』など。

○拓版画ではないが、同種の表現効果を狙った通常の木版による作例は慶長年間（1596～1615）頃から。

元禄四年（1691）刊の『新刊聖蹟図』など。

18世紀前半には、浮世絵師による一枚絵も制作される。→「石摺絵」

○《髑髏図》は拓版ではないとの説もあり。

■合羽摺

○防水性の型紙を用いて、筆や刷毛で彩色する技法。

○《着色花鳥版画》には一部に合羽摺の技法が用いられている。

○錦絵に先行する着色技法として、上方で盛んに行われていた。

延享三年（1746）刊の大岡春卜『明朝生動画園』が現在知られる最も古い作例。ほかに、明和四年（1767）刊の北尾雪坑斎『彩色画選』などがある。

○フェレンツ・ホップ東洋美術館本との比較等により、一部の彩色に木版が使用されていることが明らかに。（山口真理子「伊藤若冲の「着色花鳥版画」研究」『鹿島美術研究』）

■友禪染技法との親近性

○友禪染による掛物の作例

- ・(伝) 宮崎友禪作、卍山道白賛《寿老人図》(個人蔵)

卍山の没年より、正徳五年(1715)までに制作されたものであることが分かる。

○若冲と同時代の作例

- ・山口素絢《靱猿図》(黒川古文化研究所)

彩色の一部に型友禪の技法を使用している。

- ・蕭白落款《人物図押絵貼屏風》(個人蔵)

型紙の上から吹き墨を施した形跡が認められる。